

<書評>

金贊汀『非常事態宣言 - 在日朝鮮人を襲った闇 1948』

飛田雄一



体裁 = 四六判・並製・222頁
定価 2,415円(本体 2,300円
+ 税 5%)
2011年5月19日
ISBN978-4-00-024508-1 C0036
岩波書店

金贊汀(キム チャンジョン)の最新作だ。金は、1937年京都生まれのノンフィクション作家で、朝鮮大学校卒業後、朝鮮総連系の雑誌記者を経て独立、主に在日朝鮮人問題、教育問題について執筆を続ける。『在日義勇兵帰還せず 朝鮮戦争秘史』(岩波書店)、『異邦人は君ヶ代丸に乗って』『朝鮮人女工のうた』(岩波新書)、『韓国併合百年と「在日」』(新潮選書)、『パルチザン挽歌 金日成神話の崩壊』(御茶の水書房)などを書かかれている。

本書の内容は、以下のとおりである。

はじめに 非常事態宣言発令を伝える号外

1 民族教育の歩み

- (1) 日本の敗戦と在日朝鮮人の帰還
- (2) 朝連の結成と国語講習所の開設
- (3) 帰還の遅滞と司法権回復の動き
- (4) GHQと文部省の温度差
- (5) 占領当局の教育改革

2 米国の朝鮮政策と在日問題

- (1) 冷戦と南部朝鮮情勢の混乱 五・一〇単独選挙
- (2) 危険視される朝連と朝鮮人学校
- (3) 民族教育と日本共産党
- (4) 各地の軍政部の動き
- (5) 山口・岡山県での学校閉鎖命令とその延期

3 「非常事態」へと至る阪神教育闘争

- (1) 七三人の逮捕
- (2) 学校内の籠城
- (3) 朝鮮人を支援した日本人
- (4) 二四日、兵庫県庁知事室

4 深夜の非常事態宣言発令

(1) 発令までの経過

- (2) 「朝鮮人部落」への襲撃 朝鮮人無差別大量検挙

(3) 朝鮮人で埋め尽くされた地下室

(4) 東京都にも朝鮮人学校閉鎖令

(5) 少年の死 大阪での警官隊発砲事件

(6) 緊迫する朝連中央対策委員会

(7) 無法の嵐

5 しばしの「和解」に向けて

(1) 南部朝鮮で何が起きていたのか

(2) 沸き起こる日本への非難の声

(3) 国際社会の反応

(4) 突然の「和解」提案

(5) 拘束された在日朝鮮人の「処分」

(6) 記事差し止めの検閲

(7) その後の朝鮮人学校と占領当局

6 なぜ神戸で非常事態宣言は発令されたのか 神戸と朝鮮を結ぶ点と線

おわりに 四・二四、六一周年記念集会

「日本が連合国軍による占領下にある 1948 年 4 月 24 日夜、神戸で、空前絶後の非常事態宣言が発令された。なぜ、神戸という場所で、民族教育を求めた在日朝鮮人を対象として、非常事態宣言が発令されたのか。日・米・朝鮮半島をめぐる冷戦構造のもと、在日朝鮮人が抱えた困難を描く、渾身のノンフィクション」

これは、岩波書店のコピーである。

これまで「4.24 阪神教育闘争」については、「なぜ、神戸で非常事態宣言がだされたのか」という根本的な疑問があったが、本書はこれに真正面から答えようとしたものだ。

著者は、新しい資料として、1947年から48年まで神戸軍政部の秘書として勤務したペテー・ロアンの『日記』を分析している。その日記は、彼女のその日の出来事を書き残したものだが、知人が出版するため、アメリカの友人たちに送った手紙などもあわせて整理した。その原稿をジャパン・タイムズ社が2008年に入手し、その一部が同年10月同紙に掲載されたのである。

著者は、「神戸に非常事態が発令されたのは神戸の

治安状態が極度に悪化していたためではなく、南部朝鮮の情勢の悪化から、避難してくる人たちの避難所の設営とその安全に対する危機感があつてのこと」だという結論に達した。ただこのような見方が、今のところロアンの日記以外に公的な資料にないことも記述している。

ジャーナリストの著者ならではの流れで、朝鮮半島情勢、在日朝鮮人の運動の状況、日本共産党の動き、アメリカ本国、神戸軍政部の動きを分析しながら「なぜ神戸で」の疑問にせまっている。これまで阪神教育闘争については、落合重信、金慶海の先駆的な研究があるが、それ以降の尾崎治、荒敬、4.24を記録する会、金英達、金太基、崔永鎬、小林知子、吉田健二、金徳龍らの研究成果をふまえて、阪神教育闘争を含む戦後の在日朝鮮人の全国的な民族教育擁護の闘いを跡づけている。また、金達寿、李殷直、井田一衛ら当時の関係者の書かれたものも丁寧に紹介されている。(李殷直については独自のインタビューもおこなっている)

書名となっている「非常事態宣言」については、発令までの刻々と動く情勢、発布後の朝連、軍政府、日本政府の動きが実にリアルに描かれている。また、神戸の前哨戦ともいえる山口、岡山での闘い、神戸と並行して闘われた大阪での闘い、そして東京での朝連中央と日本政府との交渉、その顛末など、闘いの全体像を整理して提示してくれたことも本書の特徴である。1948年といえば、済州島「4.3」があるし、5.10には南朝鮮での国連監視下の選挙、8.15には大韓民国、9.9には朝鮮民主主義人民共和国が成立するまさに激動の年なのである。

昨年、「韓国併合100年」でNHKも何本かのドキュメンタリーを作ったが、シリーズ「日本と朝鮮半島」(全5回)の4回目「解放と分断 在日コリアンの戦後」(2010.7.25、54分)は、阪神教育闘争をテーマにすえたものだった。GHQ関係者も含めて多くの方にインタビューしており、先の李殷直、そして兵庫で長い間活動された梁相鎮も登場している。時期を得た内容の濃いドキュメンタリーであった。是非、ご覧いただきたい。(DVDご希望の方は飛田まで)

また、昨年8月1日には阪神教育闘争の現場のひとつである旧神楽小学校(現長田南小学校)校庭の一角

に「校名碑」が建てられたことも阪神教育闘争を記憶するために大きな意義があったできごとだ。

最後に、本書にも触れられている朴柱範のことについて、個人的感想を書きくわえておきたい。

朴柱範は、当時兵庫の朝連の委員長で、闘争の首謀者として逮捕された。実際はすでに病床にあり闘争を指導することはなかったのだが、拘留中に病状が悪化し、保釈されて数時間後に亡くなられた。本書に登場する神戸軍政部の秘書ペテー・ロアンは、朴柱範の尋問にも立ち会っている。米神戸基地司令部は逮捕した多くの朝鮮人の調書作成に追われたが、人出が足りず神戸軍政部のロアンも動員されたのである。ロアンは、朴柱範の状況について、次のように同情をよせて書いている。「彼は取調べ中に倒れて、そこらじゅうが、滅茶苦茶になりました。彼を基地所属の外科医に診察してもらったところ、末期がんの症状である事がわかりました。(中略) 目の下に、大きな黒いクマがる老人ですが、息切れで喘いでいました。ひどい光景です」

その朴柱範の遺族の消息は分からなかつたが、1994年4月の長田マダンを契機に判明した。その会場で金英達が中心となって朴柱範を中心とする阪神教育闘争のパネル展を開いた。そのパネルに見入る在日の老人がおられたが、その方が朴柱範と同郷で娘さんの消息をご存じだという。そして韓国の娘さんと連絡をとることができ、私が訪韓して調査した。そしてその後、阪神教育闘争50周年(1998)のときには娘さんらを日本に招くことができたのである。(「阪神教育闘争犠牲者の遺族を韓国に訪ねる」『むくげ通信』166号(1998.1)、「阪神教育闘争犠牲者・朴柱範さんの遺族と解放前の「本庄村」(現神戸市東灘区)を訪ねる」同168号、1998.5、参照)偶然のパネル展示からの展開に「なんでもやってみるもんだな」と金英達と話したことを覚えている。



旧神楽小学校校庭にある「校名碑」